3.3　景観構成要素としての寺院

本項では、第２章３項で述べた景観論的観点からみる都市と寺院の関係を実際の事例に基づいて明らかにする。特に、その視覚的な構成要素について、長岡地域の事例に基づいて記述する。

われわれが街のなかで寺院を認識するとき、それは景観の中に何らかの寺院らしさを感じているということである。視覚的な要素に限ると、寺院本堂のヴォリューム、大屋根、社寺建築特有の様式、墓、境内の植栽や林、山門や鐘楼、参道、奥行きがあることやオープンスペースであること、等様々な項目を挙げることが出来る。

その中から特に都市景観上、重要な視覚効果をもたらしていると思われる3つの景観構成要素―本堂のヴォリュームと大屋根、奥行き、境内の植栽や林についてとりあげ、それがどのような現象であるのかを、写真と説明図をもとに分析を行う。（写真はすべて筆者撮影）

a.　本堂のヴォリューム、大屋根

遠くから眺めた時の寺院の特徴的な外観は、本堂のヴォリュームと大屋根である。

a-1.　願敬寺（長岡市黒津町１０４１）

下の写真は、願敬寺のパノラマ写真である（fig.gk1）。中央やや左に、寺院本堂の大屋根と境内の林がある。

fig.gk2は建物の屋根によって形成されるスカイラインを描いたものである。スカイラインの中で、寺院の屋根がつくり出す幅は周囲の建物より高い。fig.gk3は建物の屋根面を抜き出したものであるが、周辺の屋根（グレーの部分）に対して、寺院本堂の屋根（ピンクの部分）は大きな面積をもっていることがわかる。また、fig.gk4は緑被面を抜き出したものであるが、寺院境内の林は緑地のまとまりとしても周囲に比べて大きい。寺院の大屋根とともに象徴性をもっている。

fig.gk1

fig.gk2

fig.gk3

fig.gk4

a-2.　専福寺（長岡市十日町３４１８）

郊外集落にある中規模の寺院である。写真左に、寺院本堂の大屋根と境内の林が見える（fig.sp1）。

建物の屋根によって形成されるスカイラインでは、本堂の屋根が飛び抜けて高さをもっており、また周囲の規模に比べて大きいことがわかる（fig.sp2）。また、屋根面を比較すると、周囲の建物（グレーの部分）に比べて、寺院本堂の屋根面は非常に大きく、反り屋根が特徴的である。また、緑被率をみると、周囲にもまとまった緑地はあるが、寺院境内のものは高さが寺院の屋根と同程度あり、ヴォリュームとしてもやや大きく、目立つものであると言える（fig.sp4）。

fig.sp1

fig.sp2

fig.sp3

fig.sp4

次に、近景で大屋根が寺院であることを示す事例をあげる。

a-3.　長福寺（長岡市西新町１丁目６－２７）

下の写真は、寺院の入り口正面からみたものである（fig.cf1）。この寺院は、住宅街の中に立地する比較的小規模の寺院で、参道や門はもたない。

fig.cf2に示すように、寺院本堂の大屋根（ピンクの部分）が、道のアイストップとなっている。高さは周囲の住宅とあまり変わらないが、その屋根面積の広さ、向拝がついていることなどから、一瞥して寺院とわかる。

比較的小規模な寺院は街並の中に埋もれがちであるは、大屋根が寺院のシンボルとして、存在感を示している例である。

fig.cf1

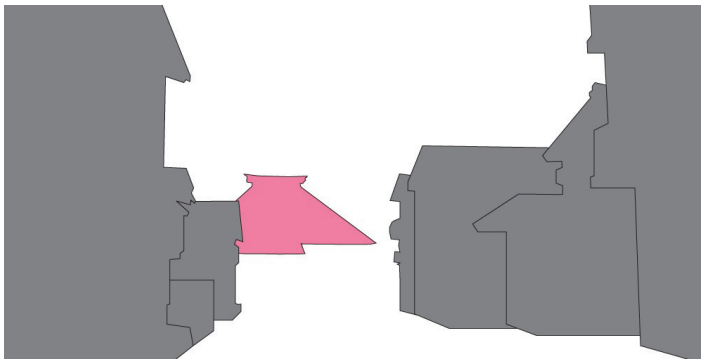


fig.cf2

a-4.　願性寺（長岡市土合２丁目２－２７）

この寺院は中心部の住宅街の中に立地する、中規模寺院の中でも比較的規模の小さい寺院である。右の写真は、寺院本堂を背面側からみたものである（fig.gs1）。

fig.gs1

fig.gs2に住宅街の中でのスカイラインを抜き出した。本堂の大屋根は、周囲の住宅とあまり変わらないが、高さと勾配という点で目立つ。fig.gs3では、特に屋根面積の広さが特徴的だと言える。

fig.gs2

また、この景観の中で、最も寺院らしさを演出している要素は墓所であろう。fig.gs4では、ピンクで示した部分がそれである。

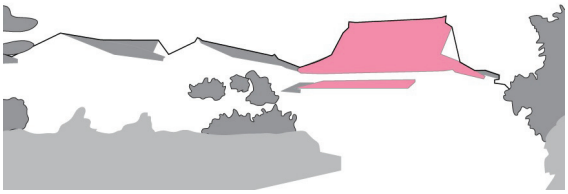


fig.gs3

ここでは、寺院の大屋根と墓所が組み合わされて、寺院の特徴的な景観を構成していると言える。

fig.gs4

b.　奥行き

次に、参道や境内によってつくりだされる奥行きが寺院であることを特徴づける例を示す。

b-1. 栄涼寺（長岡市東神田３－５－６）

中心市街地内に建つ大規模な寺院である。下の写真はその境内を参道の正面からみたもの（fig.er1）。この写真からは、まず中央奥の大きな屋根によって、それが寺院の本堂であることが一瞥して認識できる（fig.er2）。

寺院本堂へとのびる道路の両側には住宅が立ち並ぶが、手前の石柱によってそれが参道でもあることが暗示されている（fig.er3）。石柱が境界を示すことで、参道と本堂が一体となってつくり出す奥行きは、寺院という象徴を強調する効果がある（fig.er4）。この参道は実際は公道であるが、同時に参道でもあることで、境内の一部としてのオープンスペースを演出している。また、寺院本堂が道のアイストップとなっていることも、他の街路とは異なった景観構成であると言える。

fig.er1

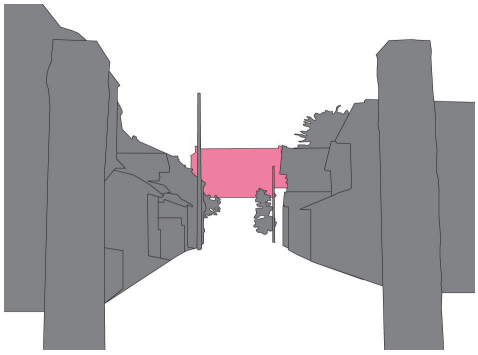


fig.er2

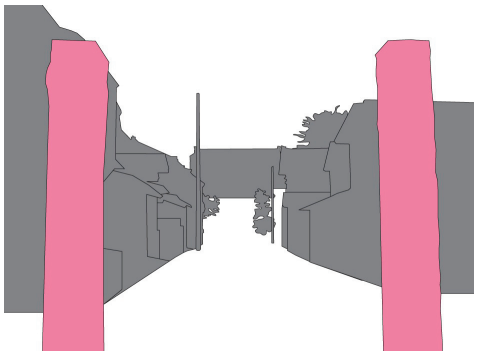


fig.er3

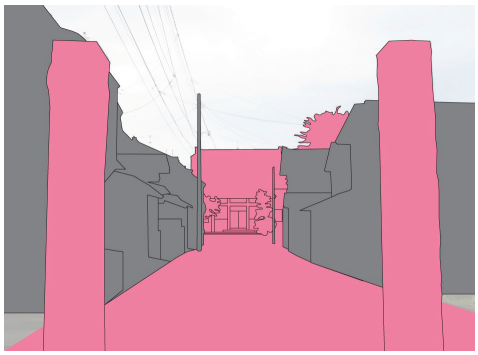


fig.er4

b-2.　西願寺（長岡市呉服町１丁目１－１１）

次の事例も、中心市街地内の例である。前寺を２寺持つ中規模の寺院である。fig.sg1は、参道の正面をみたものである。写真から分かるように、西願寺は旗竿敷地に建っている。江戸時代の地図（図3, p41）から判断すると、現在前面道路沿いに建つ建物の敷地は元は西願寺のものであったことがわかる。おそらく、当時から門前の土地を店子に貸していたか、近代になって土地の一部を商業地として売ったかのどちらかであろうと推察される。

建物と建物の間の路地の向こうに、寺院の屋根の一部が見える（fig.sg2）。屋根面積の広さと、反り屋根、向拝の一部が見えることから、これが寺院の本堂であることがわかる。

寺院の入り口自体は路地の奥にある。だが、前面道路に対して連続して並ぶ建物群の間の路地は、寺院への動線と視線を誘っている。この場合、路地は参道の延長として捉えることができる。また、奥行きとともに、奥の空間的広がりが対比的に強調されている（fig.sg3）。

fig.sg1

fig.sg2

fig.sg3

b-3.　法蔵寺（長岡市日赤町２丁目２－２６）

この寺院も前掲の例と同じく、旗竿敷地状の立地であるが、江戸時代の地割りをみると、当時既に現在と同じ道路、敷地の構成であった。fig.hz1は、境内入り口を、寺へと至る道に対して直行する一般道から見たものである。

この事例において特徴的な点は、一般道からは寺院の建物がよく認識できないことである。一般道に対して垂直な、路地のような寺院への道は、山門までの距離およそ200mほどである。そのため、fig.hz2のように、住宅の並ぶ奥に山門が認識できる程度のものである。この構図は、第２章で取り上げた「平林寺大門」の構図に似ていると言える。

この景観の中で寺院らしさを象徴する要素となっているのは、境内内の植栽である（fig.hz3）。住宅街の中で、樹木が高さとヴォリュームをもっていることは、社寺の特徴のひとつでもある。寺院の屋根や建物、墓などは一切見えないが、山門と背後に茂る樹木は、そこが寺院境内であることを象徴していると言える。加えて、200mの路地が立地の奥行きを強調するとともに、樹木のヴォリュームが奥の空間的広がりを暗示する（fig.hz4）。

この事例からは、奥に立地することは、聖域であることを強調する手段であり、景観の中で自らを異化する手法であると考えられる。

fig.hz1

fig.hz2

fig.hz3

fig.hz4

b-4.　善照寺（長岡市栖吉町２５３１）

次の事例は，郊外地域に立地するものである。寺院の規模は中規模であり、立地の分類としては、集落内かつ山裾に位置するものである。

fig.zs1は、前面道路から、寺院の境内入り口正面を見たものである。入り口からは２つの石柱と、石段を上がっていった先の山門が見えるのみである（fig.zs2）。境内の様子や大きさ、伽藍配置、墓地などは、まったく見えないが、石柱と山門によってその奥の空間が暗示されている。

次に、植栽に注目すると、境内林と奥の山の緑が一体となって見える（fig.zs3）。入り口からは、どこまでが境内で、どこからが山なのか、その境界がはっきり判別できない。このことにより、境内が山の中まで広がっているような印象、または山が境内の一部であるという印象を受ける。こうした景観構成は、神体山としての山の中へ信仰軸が延びる神社のそれにも類似性が見られる。

fig.zs1

fig.zs2

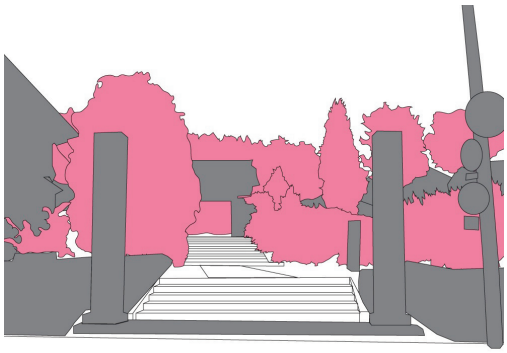


fig.zs3

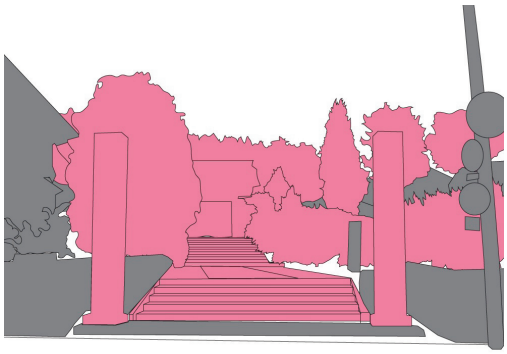


fig.zs4

b-5.　香林寺（長岡市栖吉町２５３１）

次の事例は，山の中に立地する寺院である。

fig.kr1に見るとおり、寺院の入り口は山裾にある。山門へと至る階段がのび、その脇に石柱が建っている。ここで、寺院であることを示す要素は、階段脇の石柱と、階段の先にある山門、そして、階段のつくりだす奥行きである（fig.kr2）。

また、周囲の木々が、山門への視界を遮るように茂っており、実際に山門は木々に隠れて一部しか見えていないが、こうした景観の構図も、社寺建築の特徴の一つである。「自然に内包され、視覚的にその境界を曖昧にする」という伽藍構成は、中世の密教建築以来、仏教思想の体現方法として用いられてきたことは、既述の通りである。

ここでは、林の中へと延びる階段が自然へ内包されていることを表すと同時に、山門の手前に茂る林そのものが、寺院境内という聖域へ至る境界的な領域としての役割も果たしていると考えることが出来る（fig.kr3）。

林の中や山の中に内包され“見えない奥”を持つ景観の構図は、周囲に広がる集落に対して林や山ごと聖域を示すものであり、日本の社寺建築に特徴的な景観でもある。

fig.kr1

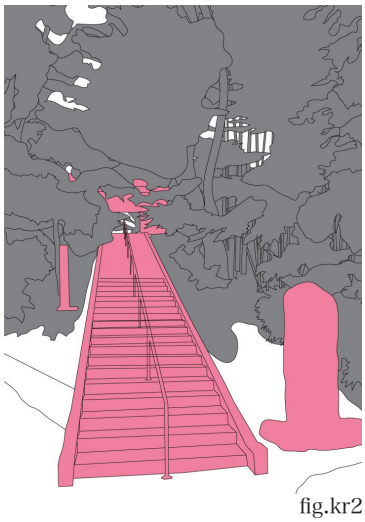


fig.kr2

fig.kr3

c.　領域性や境界性をもつ植栽

次に、特に都市景観の中で特徴的な、緑のヴォリュームが領域を示す事例をみる。竹林や木々に囲まれている景観は、社寺の特徴のひとつである。

c-1.　光伝寺（長岡市福道町６７３）

この寺院は、一般道沿いの商業ビルと普通の住宅が並ぶ地域に立地している。下の写真は、境内の裏参道側から見たものである（fig.kd1）。まず、fig.kd2に示すように本堂の大屋根が、寺院の特徴的な景観を表している。

そして、樹木に注目すると、境内の外周は植栽で囲われていることがわかる（fig.kd3）。景観の中では、境内の植栽や竹林は寺院の領域そのものをも示していると言える。また、一般道沿いの人工的要素によって構成されがちな景観の中で、街路樹と比較しても、そのヴォリュームは圧倒的である。景観上の緑被率にも貢献していると考えられる。

fig.kd1

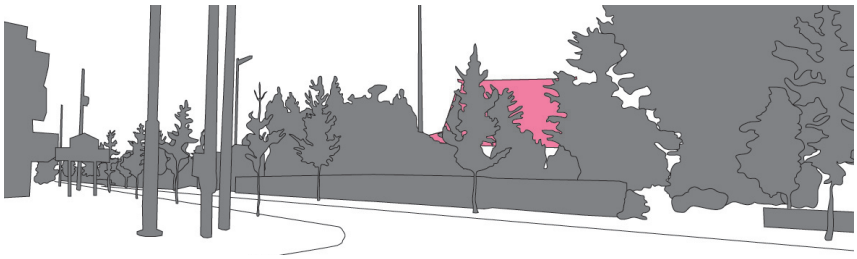


fig.kd2

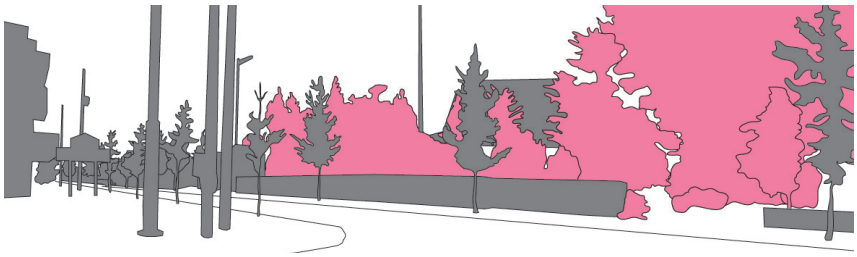


fig.kd3

c-4.　真福寺（長岡市福島町２４８７）

真福寺は、郊外地域に立地する中規模の寺院である。2階建ての戸建て住宅が散在し、周辺に田んぼが広がる地域である。

fig.cp1は、寺院の本堂裏手を、敷地境界からみたものである。本堂の手前の空間は墓所である。ここでは、まず本堂の大屋根が、寺院であることを特徴づけている（fig.cp2）。そして、境内の周縁部を囲う植栽が、墓所を目隠しのように覆うとともに、境内の境界を示している（fig.cp3）。

fig.cp1

fig.cp2

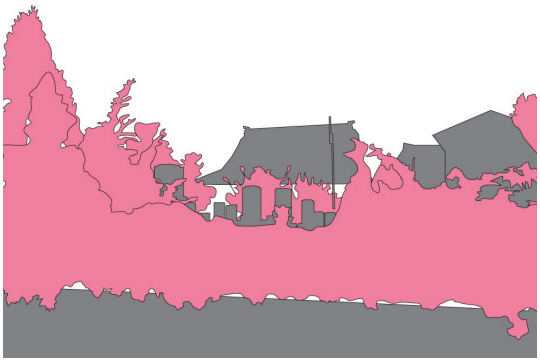


fig.cp3

c-3.　唯敬寺（長岡市草生津３丁目２－２７）

唯敬寺は、中心市街地の住宅街に立地する、小規模な寺院である。fig.yk1では、左の塀の奥が寺院の敷地である。

この寺院は、参道や大きな山門を持たない。入り口を入るとすぐに本堂と庫裏、墓地がある。

まず、寺院を囲む長い塀が、住宅街という景観の中では目立っている（fig.yk2）。また、塀とともに、敷地内の植栽も、周囲と比べて非常にヴォリュームがある（fig.yk3）。しかし一方、寺院の大屋根は植栽に隠れてほとんど見えない（fig.yk4）.

この景観では、塀と植栽によって境界線が明示されていることが特徴的であると言える。これだけでは寺院と判別する決め手とはならないが、住宅や商業ビルのつくり出す景観とはまったく異なる、囲われた空間であることは明らかである。また、境界線の内側が植栽でよく見えないことで、周囲から孤絶している感覚も受ける。

fig.yk1

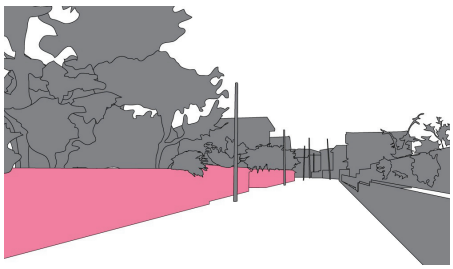


fig.yk2

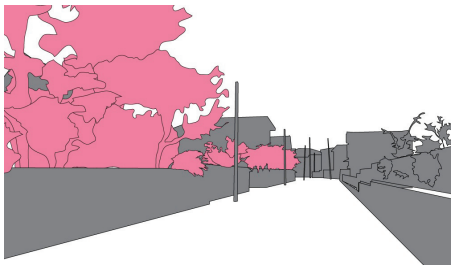


fig.yk3

fig.yk4

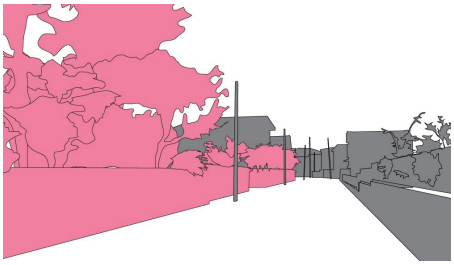


fig.yk5

c-4.　正覚寺（長岡市長町２丁目５５０）

正覚寺は、中心市街地の中でも特に、駅からすぐの建て込んだ地域に立地している。細い公道に面して、比較的境界線目一杯に建物が建ち並ぶなか、この寺院の敷地境界には大きな樹木がそびえ立ち、特異的な景観をつくり出している。

fig.sk1は、寺院の入り口を前面道路にたち、横からみたものである。左側の植栽は、境内林である。fig.sk2では緑被面を抜き出したものであるが、寺院の境内林（ピンクで示した部分）の他には目立った緑はみられない。そして、境内林が周囲の建物に対し、同規模か、それ以上のヴォリュームをもっていることがわかる。

fig.sk1

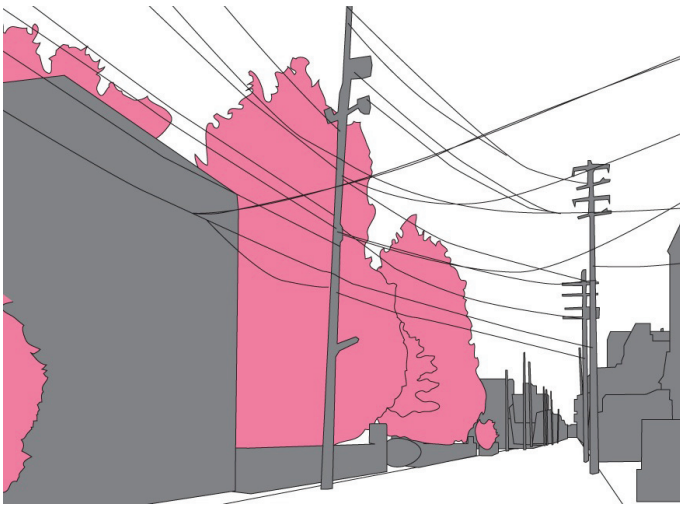


fig.sk2

c-5.　慶徳寺（長岡市土合５丁目９－１１）

次に、植栽と墓との組み合わせによって寺院や境内が示される例をあげる。

この寺院は住宅街に立地する中規模の寺院である。下の写真は寺院境内を裏手にある道から見たものである（fig.kt1）。本堂の大屋根や、参道といった景観要素はないが、境内の植栽と墓が、奥に寺院があることを暗示している。

fig.kt2は、墓のシルエットを抜き出したものである。住宅街の景観の中で、墓はその性格としても特異だが、全体的に低いという点にも特徴がある。住宅と比べると、１階分の高さもない。そのため、街並の中では視線のヴォイドともなる。また、ヴォリュームをもった樹木と組み合わされることで、奥に境内の存在が示される（fig.kt3）。

fig.kt1

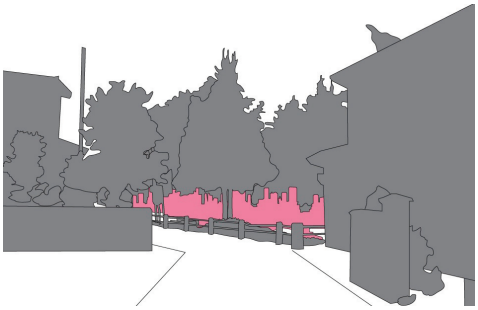


fig.kt2

fig.kt3

以上が、寺院のもつ景観要素についての分析である。これらの分析からは、次のことが確認された。

1. 寺院の大屋根はランドマークとなり得る。建て込んだ市街地の中でも、大屋根は寺院の象徴として目立つものであった。
2. 境内や参道がつくりだす奥行きは、市街地の街並とは異なる独特の景観をつくり出している。また、奥行きそのものが、都市の中でオープンスペースとなっている。
3. 境内林や植栽等の樹木は、景観において境内の領域を示す要素となっている。また、ヴォリューム規模も周囲と比較して大きく、景観上の緑被率にも貢献している。

各事例からわかるように、大屋根に代表される建築物単体の要素と、奥行きとオープンスペースといった空間構成、そして境内林や植栽等の自然要素との組み合わせによって寺院の景観を形成していることが多い。更に言えば、周囲の環境—街並や田園風景、山などの自然環境との調和や対比といった関係性の中に成立している。

ここで、第２章で引用した「古い寺や民家に親しみを感じる」人が多いということについて、古い寺や民家は何を意味するのかを改めて考える。まず人為と自然の調和を漠然と指しているように思える。そして、歴史や文化を継承しているという蓋然的印象。加えて、寺や民家とはごく普通の風景の代名詞でもあると言えるが、一方で失われつつある風景に対してのノスタルジー的感情ともとることが出来る。そこで「古い寺や民家に親しみを感じる」背景には、長い年月をかけて育まれてきたその土地の風土や環境があり、その中に発展した空間文化を指しているのではないかと推察する。

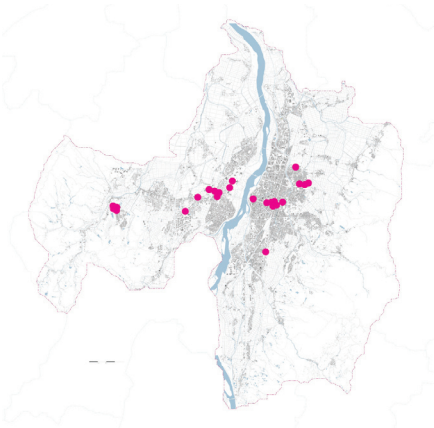
これまで寺院の継承は、建築物に対する文化遺産としての保存という観点でしか議論されてこなかった。だが、今まで培われてきたものを前提に持続的な都市環境を形成するという観点からは、ごく普通の寺院と、それが担保してきた風景や環境を社会的に継承していく方法が必要とされる。

3.4　都市施設としての寺院

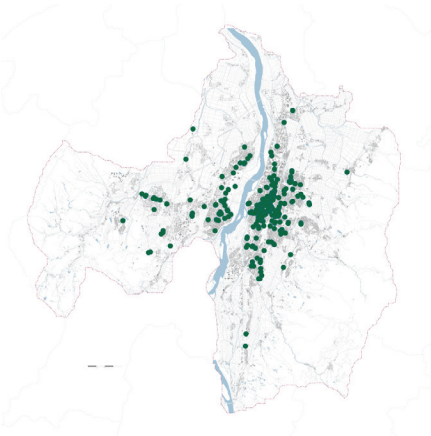
次に、地域社会、生活との関係性をみるために、寺院を他の都市施設と比較する。

3.4.1　施設分布にみる寺院

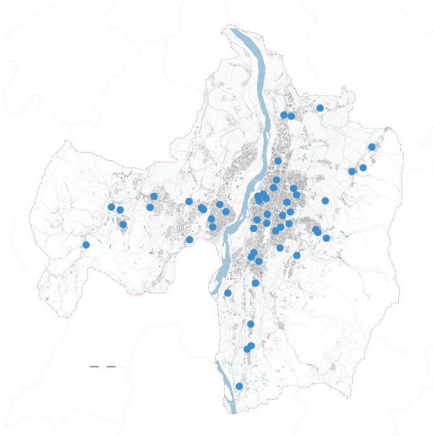
次の図は、長岡地域内における主要都市施設の分布である。最も集中的かつ数が少ないものは、大型商業施設であり、これは中心部および街道沿いに集中している。次に集中した分布となっているのは、病院であった。次いで、病院、学校、寺院、公民館等のコミュニティ施設の順であった。



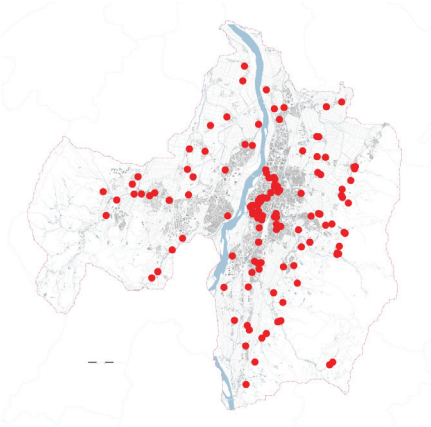
大型商業施設の分布



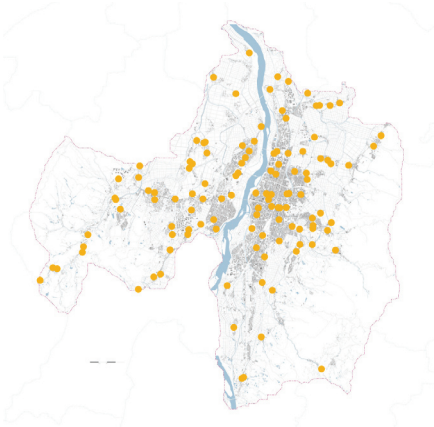
病院の分布



学校の分布



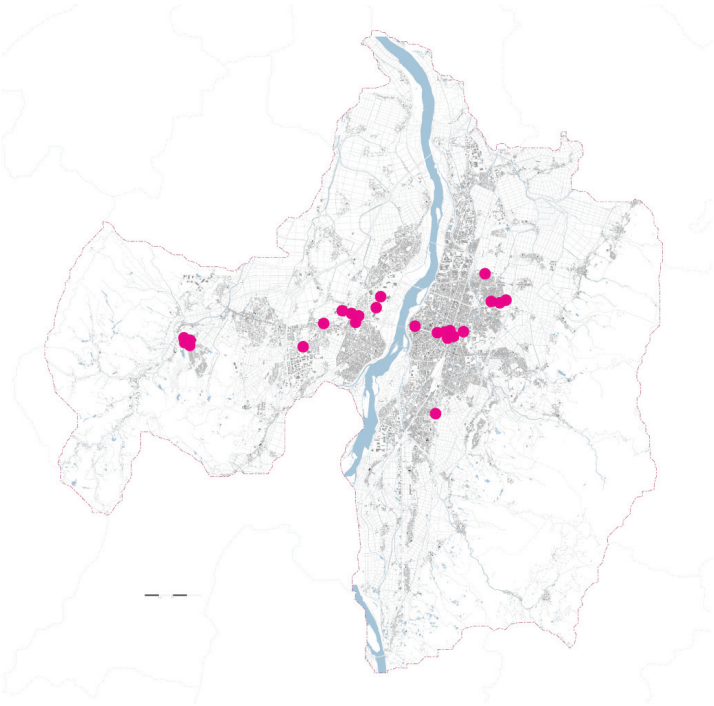
寺院の分布



公民館等の分布

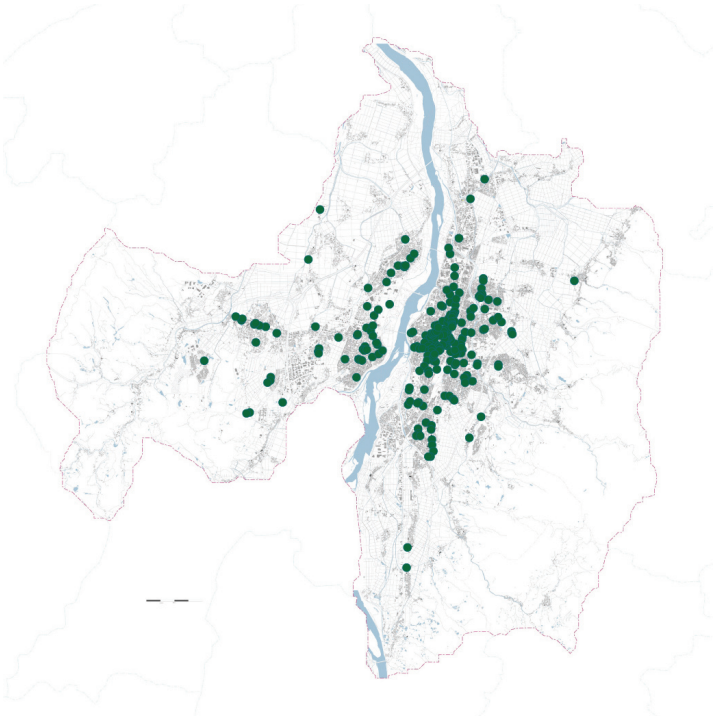
a. 大型商業施設の分布

大型商業施設は、JR長岡駅周辺および信濃川左岸の千秋が原を中心に分布している。街道沿いのロードサイドショップもその近辺にいくつか島状に展開している。小売店の数は年々減っており、長岡地域外からも車でショッピングセンターへやってきて買い物をする人が多いという。



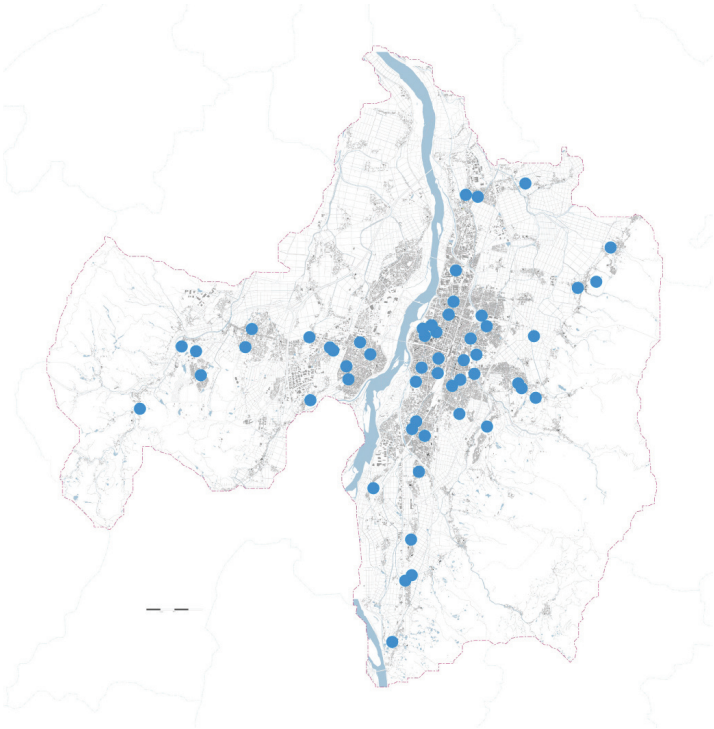
b. 病院の分布

病院、およびクリニックは、中心部から周辺地域へと拡散するように分布している。中心部では、クリニックや小規模な病院が多く集まっているようであるが、総合病院や赤十字病院などの大きな病院は、比較的郊外に立地している。だが、各地域にひとつの診療所ないし病院といった状況にまでは至っていない。



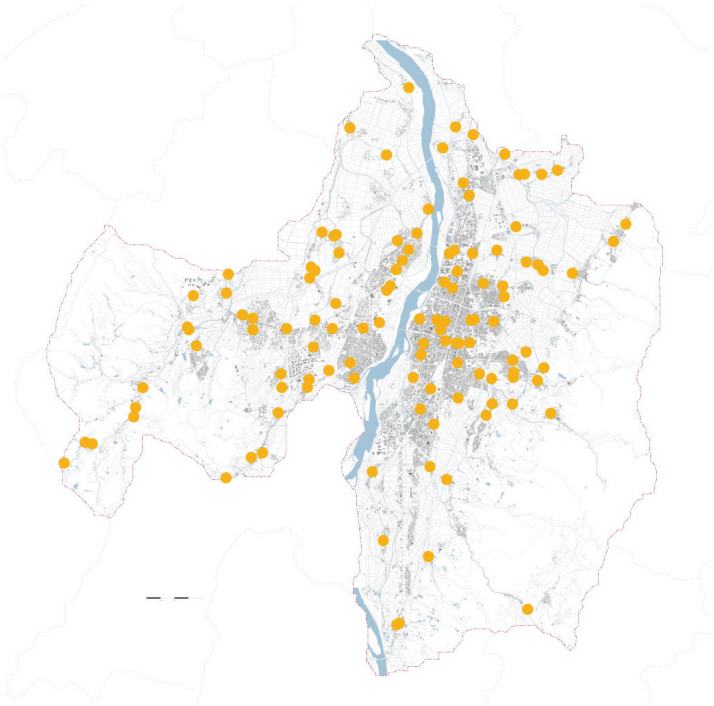
c. 学校の分布

小学校、中学校、高等学校、大学といった教育機関の分布である。小学校はおよそどの地域にも分散して配置されており、地区防災センターにも指定されている。大学施設は郊外地域に立地している。



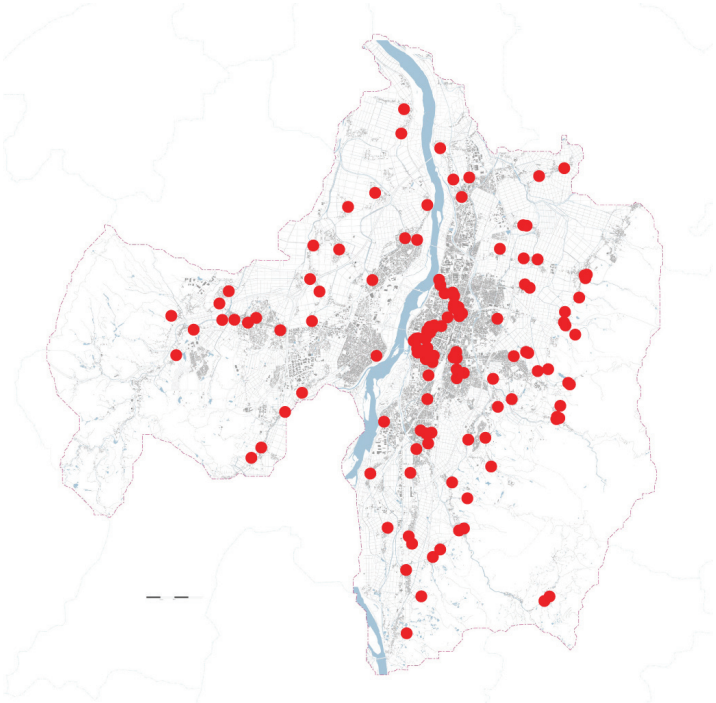
d. 公民館、コミュニティーセンター、町内会館等の分布

公民館、コミュニティーセンター、町内会館といった、施設は数も多く、地域による偏りも少なく、ほぼ均等に分散配置している傾向にある。

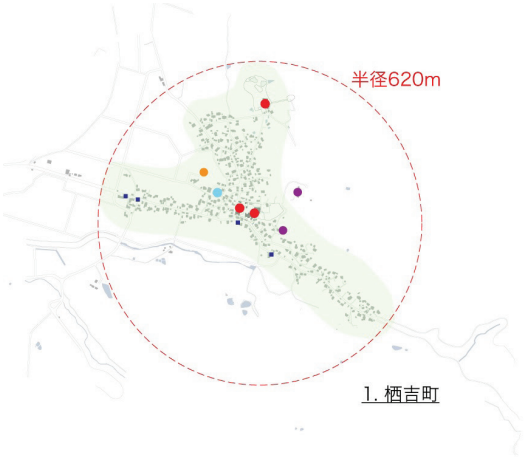


e. 寺院の分布

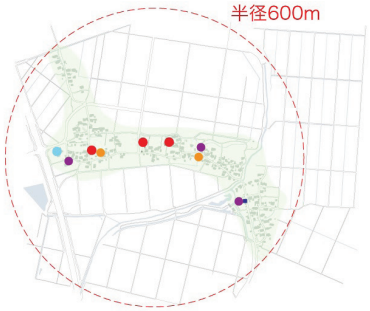
寺院は、おおよそどの居住地域にも1寺ないし２寺あることがわかった。郊外地域においては、各集落の範囲内に立地しているが、中心部では城下町形成時にできた寺町に寺院が集中しており、かならずしも各地区に寺院があるという状況ではない。



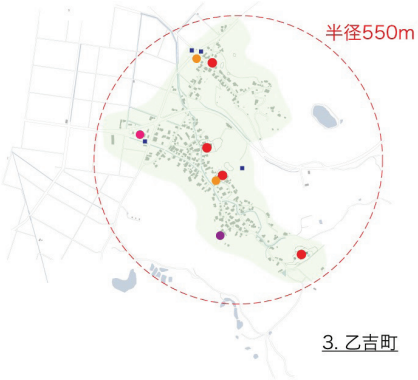
また、下の図は郊外地域における施設分布をみたものである。中心部からは慣れた地域で、明確に集合の範囲を設定できるものを、無作為に抽出し、比較した。郊外地域では居住の集合範囲は、およそ300m～600mと徒歩圏内である。そして、その中での施設分布を見ると、寺と神社はどの地域にもあることがわかる。また、公民館、コミュニティーセンター、町内会館等の施設も、1つないし2つは存在している。一方で、商店は地域によってまちまちである。幼稚園も、ある地域とない地域がある。学校、病院は、どこの地域にもない。



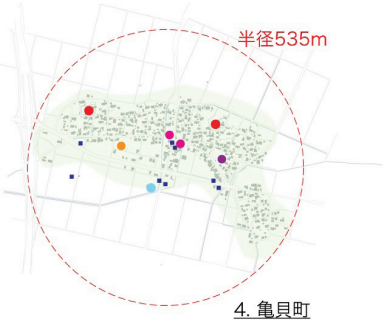
1. 栖吉町



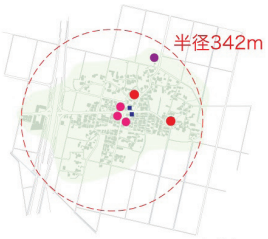
2. 福島町



3. 乙吉町

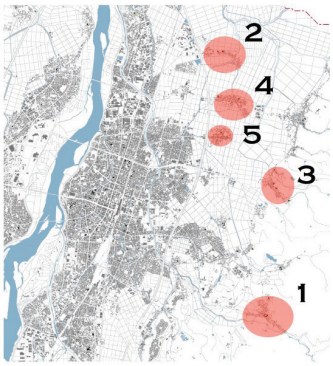


4. 亀貝町



5. 小曽根町

- 寺院
- 商店
- 公民館
- 病院
- 幼稚園
- 神社
- バス停



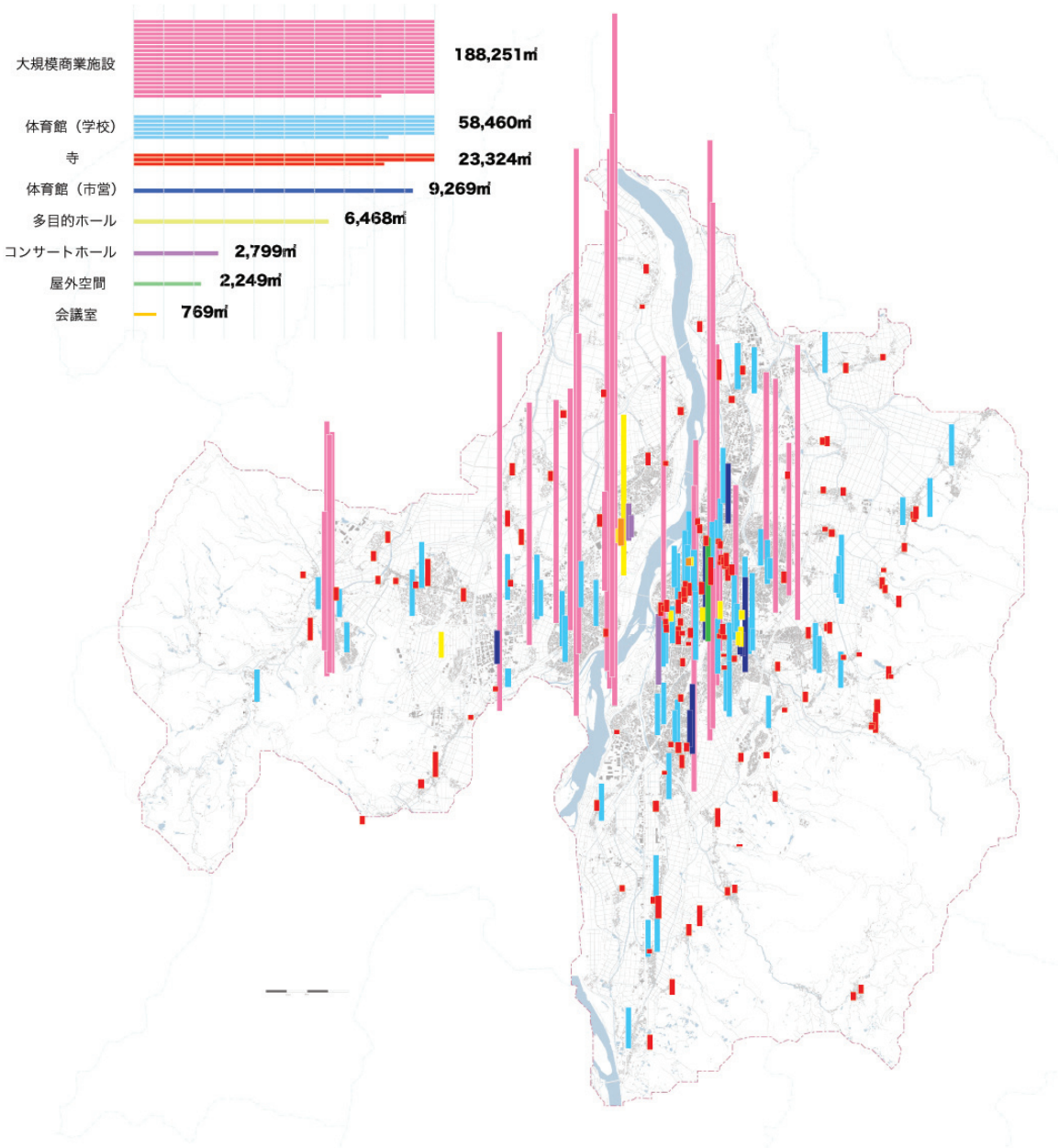
このように比較すると、寺院は病院や学校施設よりも多く分散配置し、地域コミュニティー施設よりは少ないということがわかる。

またこの比較は、中心部に集中して立地している大型商業施設が何らかの交通手段でのアクセスを前提にしているのに対し、それが病院、学校、寺院、公民館の順に、数が増え分散されていくことで、徒歩でのアクセスが容易になるという指標にもなる。

特に、郊外地域における都市施設の立地状況をみると、病院や各種商店などの生活必須施設がそろっていない地域でも寺院があるということがわかった。コミュニティーセンター等の施設も同様である。

3.4.2　面積比に見る寺院

下の図は、長岡地域内の各種都市施設の面積比を表したものである。長岡地域ではショッピングセンターが飛び抜けて広大な面積を有していることがわかる一方、次いで学校や公共の体育館が広い面積を有している。そして、その次に寺院本堂の面積が、総合として大きな面積を有している。

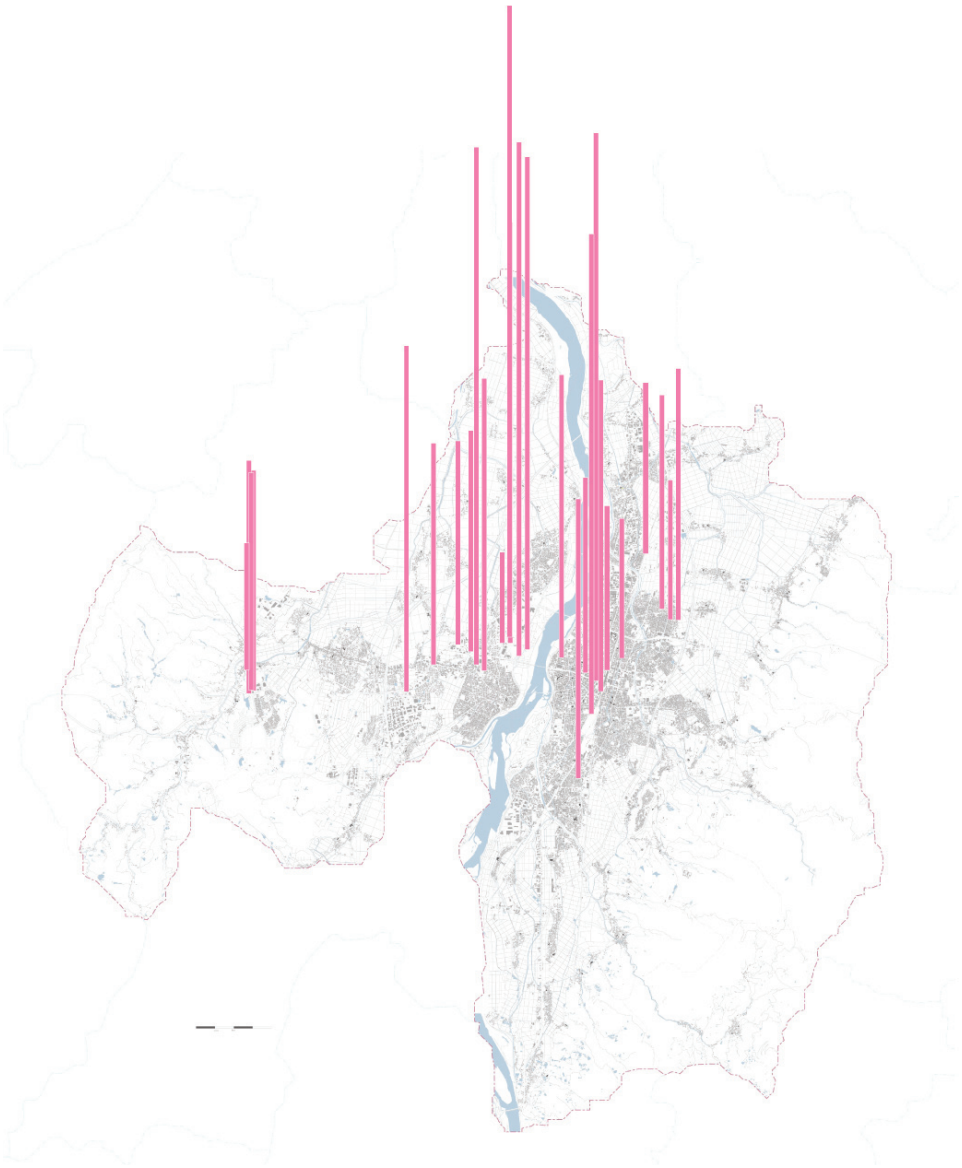


長岡地域における各種質の面積比較図

（※）ここでは寺院本堂の面積と、他施設の一室辺りの空間面積を比較対象としている。そこで、300へ㎡以上の大空間を有する施設に限って比較対象とした。そのため、一室空間が300㎡未満である公民館、学校、図書館などの施設に関しては、比較対象としていない。

a. 大型商業施設の面積

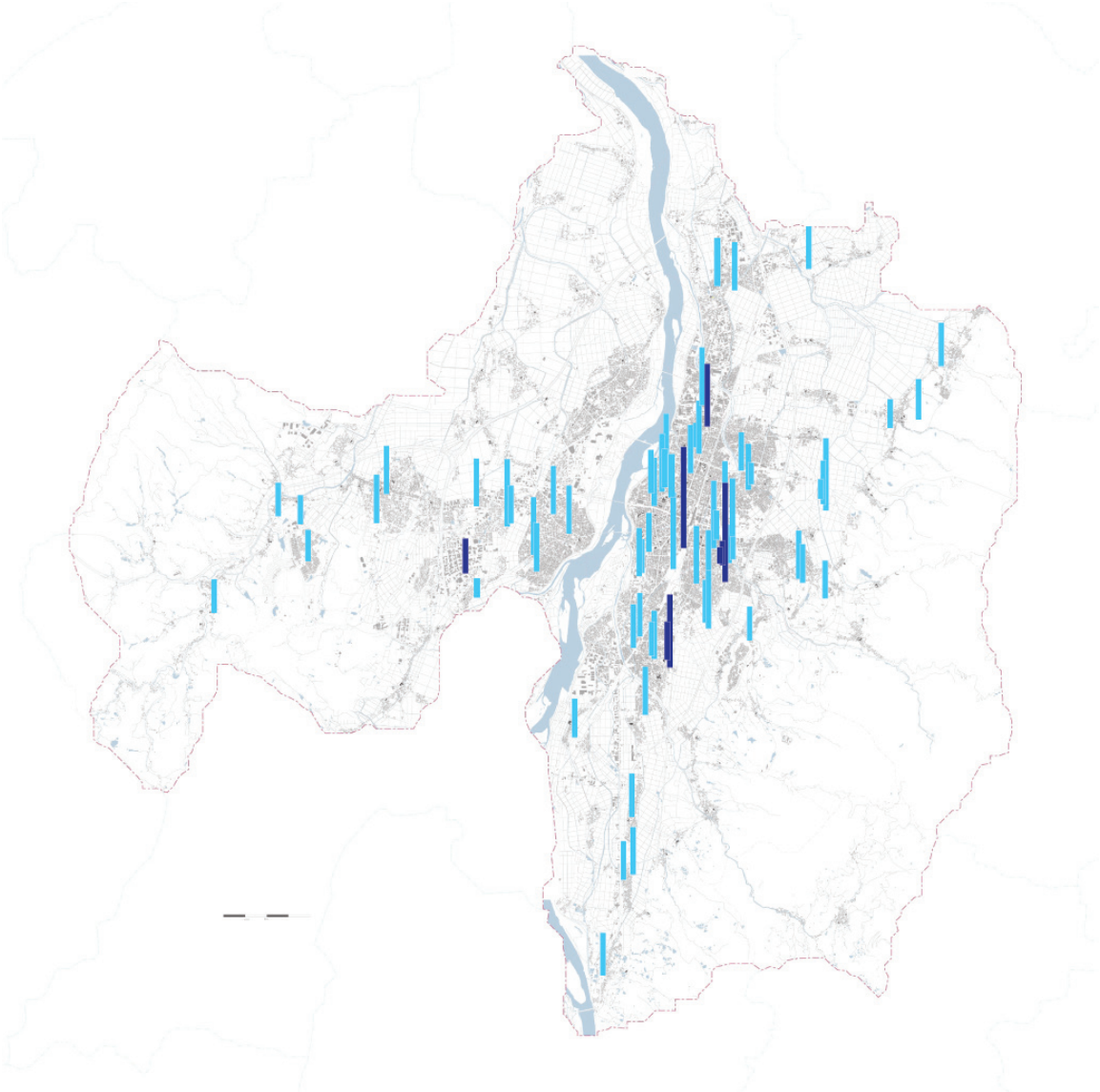
「新潟県大規模小売店舗一覧表」[1]を参考に、大規模商業施設の面積を地図上に表したものが以下の図である。面積の大きいものとしては、信濃川左岸の千秋ヶ原エリアにアピタ長岡（27,221㎡）、新長岡ショッピングセンター（21,700㎡）、長岡アークプラザ南（12,313㎡）などが集中している。また、北陸自動車道の長岡ICと国道が交差するエリアにも、大型商業施設が集中して立地している。信濃川左岸ではJR長岡駅周辺に、越後交通ビル（13,093㎡）、長岡駅前城内ビル（13,000㎡）、CoCoLo長岡（11,415㎡）などが集中している。



[1] 「新潟県大規模小売店舗（店舗面積1000㎡超）一覧」（平成22年10月末日までの届け出）新潟県商業振興発表資料より

b. 体育館の面積

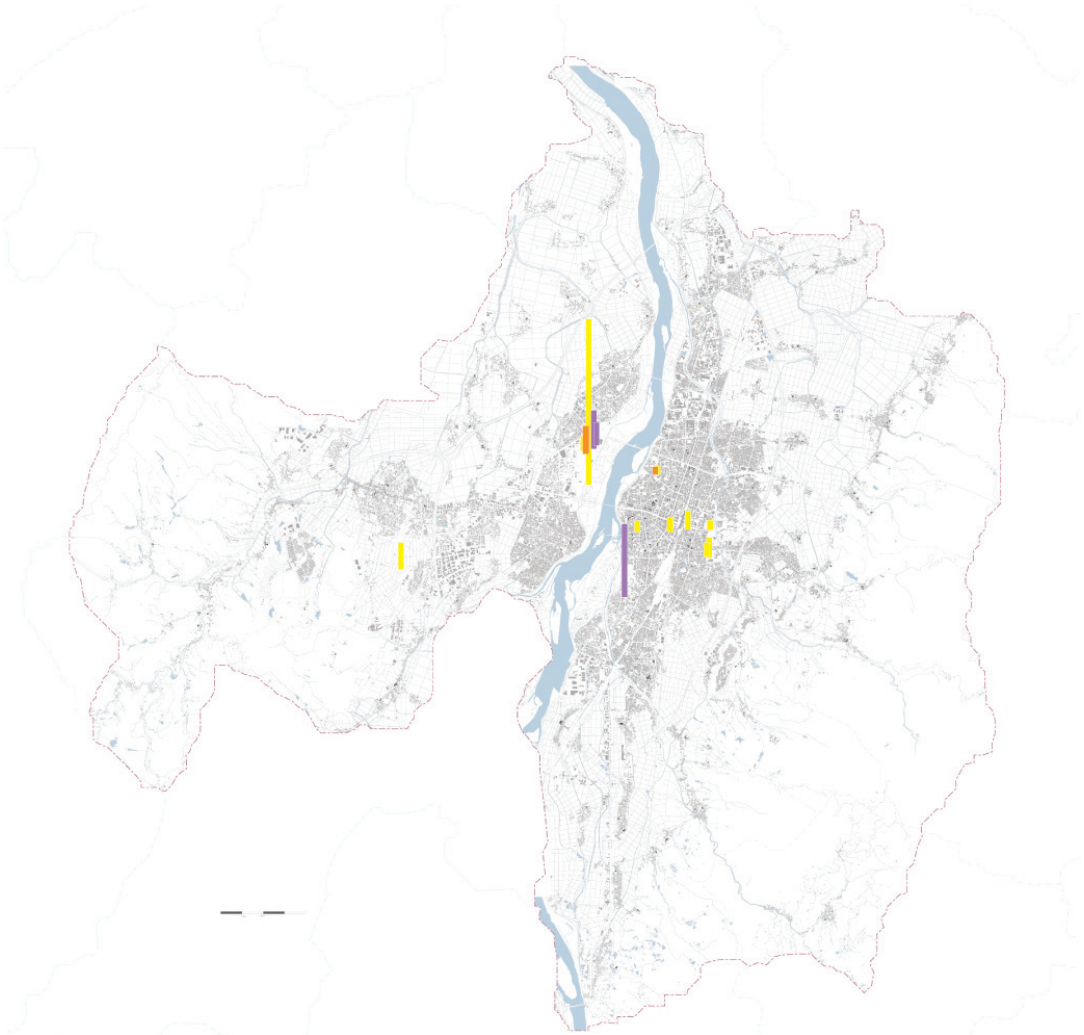
市営体育館及び、学校体育館の面積を地図上に表したものが以下の図である。市営体育館では、長岡市市民体育館が大アリーナ（2,048㎡）や武道場（502㎡）などを有し、総合で 3,916㎡の大空間を保有している。長岡市南部体育館は2,310㎡、長岡市北部体育館は1,456㎡である[2]。また、各学校体育館は、800㎡から1500㎡程度の規模のものである[3]。



[2] 「新潟県 体育館（競技面積950㎡超）一覧」新潟県統計資料、及び「長岡市ホームページ内、公共施設一覧」より
[3] 各学校体育館を地図上で筆者が計測し、算出した

c. その他の施設の面積

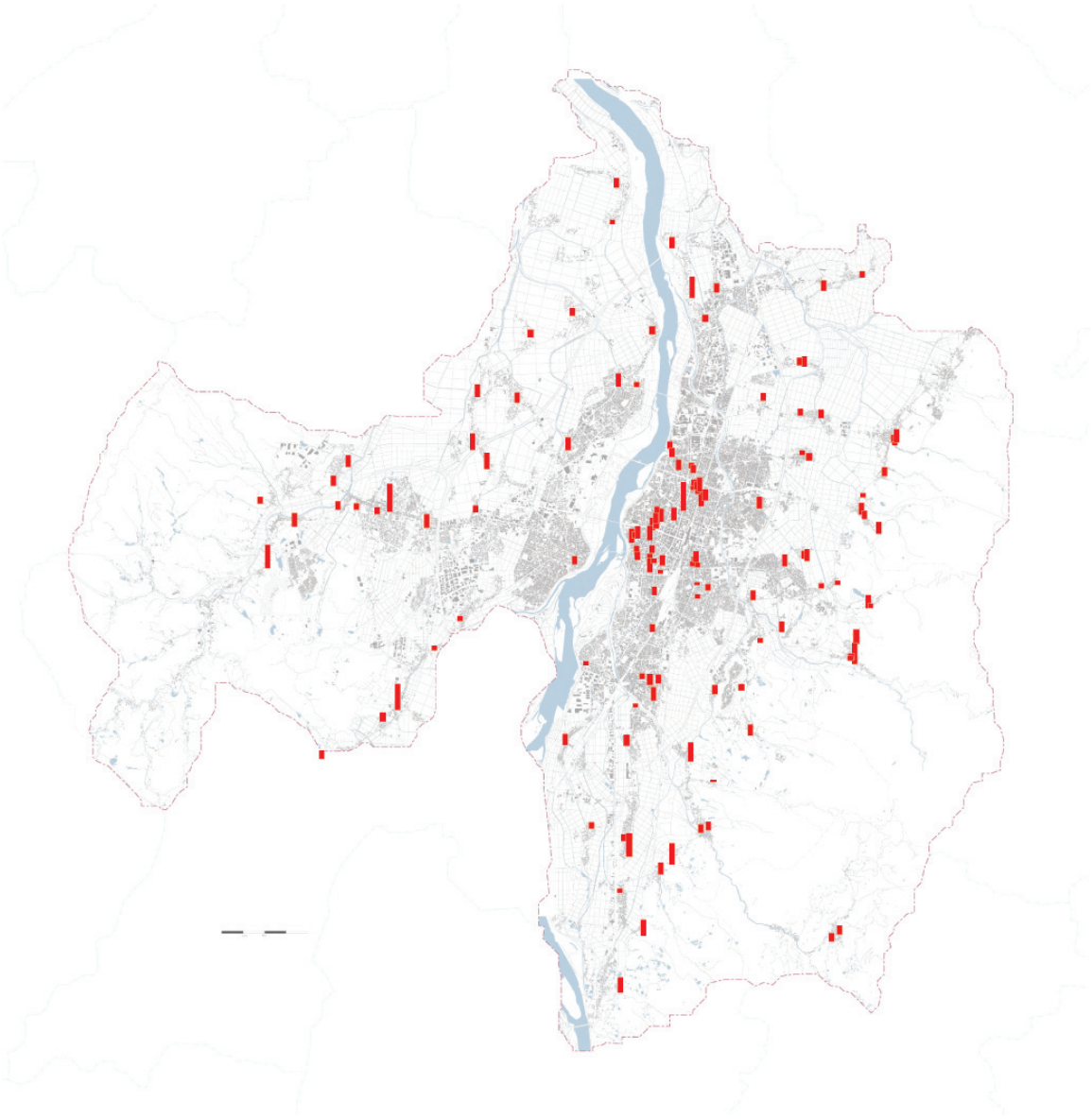
黄色で示したものは多目的ホール、オレンジで示したものは会議室の面積である。特に、信濃川左岸の千秋ヶ原地区のコンベンションセンター、ハイブ長岡が広大なスペースを保有している[4]。また、紫色はコンサートホールである。千秋ヶ原地区のリリックホール（800㎡のホール、480㎡のシアター等[5]）と、信濃川右岸の長岡市立劇場（大ホール1520㎡[6]）が主なものである。また、現在長岡駅前に建設中のアオーレ長岡には、2090㎡のアリーナや、2250㎡のナカドマ（屋根つき広場）などが計画されている[7]。



4　ハイブ長岡ホームページより（http://www.hive.or.jp/main-link.htm）、その他のデータについては長岡観光コンベンション協会ホームページ（http://www.nagaoka-navi.or.jp/）内の、各施設案内による
5　http://www.nagaoka-caf.or.jp/floor
6　http://www.nagaoka-caf.or.jp/floor/floor_gekijo
7　http://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/kouseikaikan/syoukai.html

d. 寺院の面積

下の図は、寺院の本堂の面積を地図上に示したものである。寺院本堂の面積は、小規模なものだと100㎡程度のものもあるが、だいたいが200～300㎡、大きいものは400～600㎡であった[8]。公共空間の面積としては小規模であるが、数が多いため総合的には広い面積を保有しているという結果となった。



[8] 各寺院の本堂を地図上で計測の上、算出

以上のように、寺院は他施設に比べると単体での面積は小さいが、地域全体の総合面積としてみれば、ある程度の面積を保有し得ることが分かった。

以上の、広域での施設分布比較、および郊外地域における施設分布比較からは、長岡地域における寺院の遍在性が確認された。また、各施設の面積比較からは、小規模ながらも一定の面積を保有した空間が、地域全域に広く分散してあることがわかった。これらの分析からは、以下のことが言える。

1. 寺院は、長岡地域内において、遍在している。
2. 寺院の室内空間は、総合すると都市の中でもある程度の広い面積を保有している。

寺院を、一種の都市施設とみなした場合には、各地域に同様の空間が遍在しており、かつ郊外地域では必ず徒歩権に立地している点は、非常に有利である。現在の寺院の利用実態（ヒアリングを参照）を考えると、寺院は有効活用できる空間を余剰にストックしているという現状が明らかになる。

病院や商店などのシビルミニマムが満たされていない郊外地域では、寺院がそうした施設の代替機能を果たす拠点となりうる。また、コンサートホールやコンベンションセンターは中心部に偏り、またその数も少ないが、寺院の本堂をこうした用途に使うということも可能である。寺院を都市施設のストックとして考えれば、このような様々な活用方法を検討することが可能である。

3.5　まとめ

3章では、長岡地域の寺院の現状を様々な観点から分析した。その結果、まず明らかになったのは、檀家数の減少という見通しである。これは、長岡地域への大幅な人口流入や、周辺地域の生活構造の変化などがない限り、ほぼ確実であると言える。そうなれば、2050年までには、経営難に陥る寺院が出現することが考えられる。現状では、廃寺となった寺院は取り壊されるが、今後何寺もの廃寺が出た時に、建物や境内をどう継承していくかを検討する必要があるだろう。また、どの寺院も檀家の寺離れへの危機感を抱いていると同時に、地域社会との関わりを構築することに対しては肯定的であった。これからの時代、寺院が経営戦略として、地域社会に対して何らかの公益サービスを展開し、存続していくということも考えられる。

長岡には150あまりの寺院が存在する。都市施設としての比較からは、寺院は病院や学校がない地域にも存在し、その遍在性は公民館などに次いで高いことがわかった。また景観的に見れば、寺院の大屋根がランドマークになる景観、寺院境内のもつ奥行きや境内林は、景観の中で価値あるものであることが確認された。病院、コンサートホール、多目的空間、などの公共施設が偏って分布していることと合わせて考えると、寺院をそれらの代替機能を担う拠点として再活用できれば、大規模な都市再編成を行わなくても、各地域の生活の質を向上させることが可能である。

そして、景観的な観点からは、寺院は境内空間や自然要素と関係しながら、多様な景観を形成していることが分かった。長岡地域の寺院の状況、ひいては第2章でも述べたように仏教寺院の抱える問題を考えると、寺院の存続に関する懸念は、寺院の景観の継承に対する懸念でもある。

景観の継承はその土地で培われてきた空間文化を社会的に継承していくことにつながる。寺院の景観はそのひとつに過ぎず、長岡地域を見れば、山、水系などの豊富な自然環境や、農村風景、市街地の雁木などの独自の生活様式の発展、など様々な景観に価値がある。これら個々の景観要素が組み合わされて、その地域独自の豊かな郷土風景、ひいては原風景をつくりだしている。

人口が減少し都市のコンパクト化が進められる中、その土地の空間文化を継承する観点が求められる。寺院を何らかの形で使い続けいてくことは、それらが担保してきた景観や環境を、歴史や文化の断絶を最少にとどめて新たな都市空間をつくることにつながるであろうと考える。